

序文

今年もまた「2021 年度全国調査報告書」が完成し、皆さんと共にわが国の造血細胞移植の活動状況をリアルタイムで確認できること、大変嬉しく思います。この成果は、日本造血細胞移植データセンターによる弛まぬ尽力と、全国の移植医・データ入力者の日々の努力の結晶によるものであることに心から感謝と敬意を表します。またこのような「報告書」という形態をとるようになって 20 年を超え、この中にはわが国における約 30 年間の活動状況がまとめられており、この蓄積は日本の移植医・移植施設のスタッフにとっての貴重な記録であり、誇りです。

昨年度に続き、この一年も全世界が新型コロナウイルスの猛威に振り回されています。しかし、移植医療を必要とする患者数に変わりはありません。このような状況下で今年度の報告書には 2020 年度の移植数およびその成績が加味されていますが、COVID-19 パンデミックの初年度である 2020 年においても我々の活動はさらにパワーアップしており、全移植数は初めて 6,000 件を超えたことを知ることができます。このように我々の熱意と対策は自然の脅威にも負けない確固たる地力をもったレベルに達していることが数字によっても裏付けられ、とても心強く思います。

わが国における世界でも類を見ない臍帯血移植の伸延と PTC y ハプロ移植の普及による血縁ドナーからの移植数の増加は、近年の特色として 2020 年でもみることができます。非血縁ドナーからの移植も末梢血移植が少しずつ増加しており、全体のアクティビティを支えています。さらには悪性リンパ腫・多発性骨髄腫を中心とした疾患を対象とした自家移植も確実に数を増やしていることが判ります。

2021 年度は日本造血細胞移植学会が「日本造血・免疫細胞療法学会」に名称変更した記念すべき年でもあります。日本造血細胞移植データセンターも近年、免疫細胞療法を始めとする造血幹細胞移植以外の細胞療法・再生医療等製品に関するレジストリなどへの業務の拡がりを担っており、おそらく近い将来、この分野の登録結果の公開がさらに進み、移植療法と同様に将来の細胞療法に反映されるとともに、日米欧間の国際協調の担い手として、さらに重責を負うことが期待されています。

私たちの造血細胞移植、免疫細胞療法が将来にわたってさらに進歩していくためにも、これまでの道程をしっかりと確認することが必要であることは言を待ちません。進歩の糧にすべく、お手元に届くこの報告書が皆さんの必ずやお役に立つことを確信しております。

2022 年 2 月

第 44 回日本造血・免疫細胞療法学会 総会会長

東京大学医科学研究所 臨床精密研究基盤社会連携研究部門 特任教授

高橋 聡